

# 不在の人

劇団 くるま座 第七回公演

— 原題『階段下の貧者』アンリ・ゲオン作(1875～1944) 磯見辰典訳・演出 —

この物語は、ローマ市内のある邸宅の門戸から始まる。『門は開いている・・・』という開口一番の門番の科白通り、ローマの名門貴族が大富豪である元老院議員エウフェミオの邸宅の門は、貧しい人々に向けて開かれていた。行商人と門番の掛け合いて始まるこの物語の舞台は、第一幕から第三幕まで一貫してこのエウフェミオの邸宅である。

敬虔なキリスト教徒エウフェミオ家にも、大きな永年にわたる悲しみがあつた。息子アレクシウスは十八年前の婚礼の晩、花嫁エミリアを棄てて出奔。必死の捜索にもかかわらず未だ行方不明。以来純真な乙女妻エミリアは、夫アレクシウスを待ち続けている。そこへ、エミリアへの再婚話が持ち上がる。暫くまえからエウフェミオ家の階段下に住むようになっていた貧者は、実は、素姓を隠しローマへ舞い戻っていた行方不明の夫アレクシウスである。が、まだ家の者は誰も気づいてはいない。

『不在の人』の場面、第三幕では、紀元四世紀末爛熟期にあつたローマ帝国は、北方の異民族ゲルマン人の侵略に怯えていた。ローマの陥落という一時代の終焉をひかえた大きく揺れ動く世界である。

生涯を禁欲生活に身を捧げ、神の人として尊敬されながら清貧のうちに死去したといわれる聖アレクシウスの伝説は、シリアに発生しヨーロッパ各地に語り継がれ、聖アレクシウスとともにエミリアの生き方が中世キリスト教世界において一つの夫婦の理想の極致として高く掲げられたのである。

この物語が語り継がれた時代を追ってみると、アレクシウス失踪が376年、シリアで5世紀に伝承され、8世紀にギリシアで物語の後半が付加され、977年ローマに彼の名を冠した修道院が建てられ、12世紀にはフランスで吟遊詩人が歌い、15世紀には『アレクシウス修道会』が創設され、1920年フランスの詩人であり劇作家であるアンリ・ゲオンによって脚本化されたのである。

実に十数世紀に渡って、語り継がれたこの物語が、最後に脚本化された時代的背景には因縁じみたものを感じざるを得ない。折しも世界中を震撼させた第一次世界大戦の時である。ローマの陥落の時と同じく北方のゲルマン民族即ち、ドイツ帝国の台頭である。この戦争によって世界中は大きく揺れ、未来への大きな不安と絶望を感じ始めていた。

詩人であり劇作家アンリ・ゲオンは、この頃宗教的神秘主義に心をひかれるようになり、みずから劇団を結成し、中世キリスト教に着想を得た神秘的な作品を書く。

『不在の人』(原題『階段下の貧者』)はその一つである。

公演日程 鎌倉中央公民館分館 6月15日(土) 昼1時15分  
夜5時45分  
朝日生命ホール(新宿) 6月21日(金) 夜5時45分  
6月22日(土) 昼1時15分

## Information

ANTIQUES FAIR

ミルクホールでは、月に一度蚤の市を開催しています。江戸期・明治・大正の骨董や、ガラクトを中心、懐かしいもの、楽しいもの、使ってみたいものを集めます。毎月第二土曜日・日曜日、朝9時よりミルクホールにて

★今月の予定 6月8日(土) 9日(日)

★来月は年に3回だけの売り出しです。  
夏の市 7月12日(金)～21日(日)



『不在の人』の台本を読んで・・・

昨年初秋のころだったか『私を芝居に出してもらえませんか?』という我が亭主殿の突然の言葉には、本当に驚かされた。私達はその時『不在の人』の翻訳者であり、演出家である磯見辰典氏とある酒席で同席していたのである。

『言っておくが、私に嘘や冗談は通用しないよ。』我が亭主と向かい合う席に座っていた磯見氏は、厳しい口調でそう言われた。それで出演決定である。

昨年未台本が出来上がり、我が亭主の芝居に掛ける生活が始まった。決定した役柄は『門番』。夢にうつつに繰り返し繰り返し聞かされる科白は私の耳にも自然と入り込み今ではすっかり覚えてしまった。

私の中に知らぬ間に入り込んできたこの物語は、正直に言ってかなり不可解な点も多い。この禁欲的で秩序的な究めて中世的なキリスト教世界は、私達現代人の想像を絶しており、もしかすると我々にとってはかなり破壊的なものかもしれない。

この難解な物語が私達の生活に取りついて数か月、物語を真に理解出来ないままに過ぎた頃、ふと思いついたと思われるアンリ・ゲオンがコクトーという人に会った。

ある雑誌で記載されるには、不遇な天才ジャン・コクトーが当時のパリ文学界の中心だった先鋭的で攻撃的なグダリスト・シュルリアリスト達から徹底的に排斥されていた時当時の有力な文芸雑誌『N・R・F』の編集首脳部でありパリ文学界に於いて多少の権力を持っていたと思われるアンリ・ゲオンがコクトーに対してふと、同情的な立場をとったという記録が残されていたのである。中世キリスト教世界と、コクトーとアンリ・ゲオン。この結び付かない組み合わせには、この物語のもう一つの真実が隠されているのではないのだろうか? アンリ・ゲオン、彼が生きた時代は正に激動の時代。人類の初めての危機とも云える第一次大戦中に彼は、カトリックに改宗し大戦直後にこの物語

を脚本として発表している。世にも悲惨な戦争を体験した彼のその時の思いこそこの芝居を造るに至ったひたむきな情熱であった事は想像に難くない。が、彼の指導すべきパリ文学界は叫んでいた。全ての既成の価値観を破壊しろと。

そして彼自身も芸術的理想に燃え、多様な仕事ぶりを残している。私が感じたこの物語の不可解さや、難解さは、実は彼自身の感じていた不条理であり、理想と現実世界との矛盾であったのだろうか。

いつの時代にも無くなる事はない不条理が、この芝居の中でも門番や、貧者や、様々な人の口を借りて語られる。

『門は、開いている・・・』 門とは? 門番とは? 門の外は何? この幕開けの最初の科白が私はいちばん気に入っている。

(門番の役は、ミルクホールのマスクーが演じます。ほかにも多くのミルクホールの仲間達が出演。私事ですが、お時間のある方どうか御覧下さい。)